

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第7期ゼミ長 氏田宗利

僕の場合はこうだった；

「送信者 Akinori Ono <akinori@fbc.keio.jp>

宛 先 Munetoshi UJITA

件 名 Re: 卒業論文に関しまして

氏田宗利君

添付ファイルで合格にしましょう。おめでとう。

編集・印刷開始まで、今後も自由に改訂してください。

・・・」

「合格。」そして、先生が発した「おめでとう。」この言葉に接した時の何とも言えない感情。心の中で静かに「やった。」と一人つぶやく感じ。これは、小野ゼミで高密度な学究生活を送った者なら、誰もが味わう至福のひとつ時であろう。僕の場合、「その時」は、出先へ向かう地下鉄の乗車中に訪れた。手にして間もないiPhoneで目にしたこの言葉。一刻も早く先生に返信をし、これまでの感謝の言葉を述べたい。そんな強い衝動に駆られた。だが、この衝動の発散は、地下鉄に乗車中であることに加え、パソコンをもち合わせていないという間の悪さのために、不首尾に終わってしまった。そんなこともあってか、僕には、「その時」の衝動が、今も胸のなかを、静かに、しかし強く、反響し続けている。

きっと、小野ゼミ第7期生の誰もが感じたであろう、この衝動。純粹に、感謝の言葉を捧げたくなる、ひとつ時。どうやら、小野ゼミで学んだことは、研究対象たるマーケティングの知識といった“what”的なるものや、研究方法たる仮説構築・実証分析といった“how”的なるものというよりも、人間として生きていくうえでもっと大切な、それこそ人間存在の根本に根差した「何か」であるらしい。

「成長とは結果であり、ヴィジョンではあり得ない。」——これは、私が最近ふと耳にした言葉であるが、なかなか興味深いと思う。それは、この言葉が、「成長とは、意識的に獲得されるような代物ではなく、物事に全力で取り組み、その後になって初めて可能となる遡及的な意味づけ」ということを示唆しているように感じるからである。しかしながら、「小野晃典研究会第7期生」としての入会を志した者は、およそほとんどの者が、それでも敢えて成長をヴィジョンとして捉え、あるいは遊びつくした日吉での2年間を三田で取り返すために、あるいは日吉での学びを三田でさらに発展・昇華させるために、小野晃典研究会の門を叩いたのであった。

以後、我々小野晃典研究会第7期生は、およそ全てのゼミ活動に、少なくともそれぞれの主観的には全

力で取り組んだに違いない。そうした日々はまさしく怒涛のように過ぎ去り、今、走馬灯のように思い起こされる——入会が決まったその瞬間から始まった第1回ケース・メソッド、初めての本ゼミでのプレゼンテーション、週末は決まって徹夜で格闘した基礎文献レポート・多変量解析技法実習報告書、白熱し相手に睨みをきかせたディベート、役職を皆で話し合っただけで決めた春合宿、小野ゼミの対外試合連勝記録を継続させた中央大学久保知一ゼミナール・関西大学岩本明憲ゼミナールとのインカレ・ディベート、関西ビジネスプラン・コンペティション KUBIC への挑戦と2年連続の本戦出場、義塾を代表して受け持った高校生のための体験講座、大挙して参加させていただいた大正製薬インターンシップ、小野ゼミ伝統の夏ケースに取り組んだ夏合宿、日本語／英語での三田祭論文執筆、大盛況の三田祭小野ゼミブース、各論文報告会での威風堂々としたプレゼンテーション、3度に渡って開催したオープンゼミ、商学会賞受賞、大好きだった先輩・第6期生との別れ、かわいい後輩・第8期生との出会い、国際eビジネス学会優秀研究論文賞受賞、先輩としての振る舞い方を議論した春合宿、今年は快晴だったBBQ大会、明治神宮球場でのサブゼミ／皆で立ち会った義塾野球部リーグ優勝の瞬間、開題に苦しんだ夏ケース／最後の合宿夏合宿、小野先生のサヨナラ・ヒットで一矢報いたソフトボール大会、販促会議賞でのシルバー賞受賞、大好評を博した「三田純豆腐鍋チゲ&アスカ」、卒論執筆に悪戦苦闘する日々、常勝ゼミとして他ゼミから一目置かれたフットサル大会、つるのやでの定例コンパ、7期8期合同ケースで締めくくった最後の本ゼミ、タイへの卒業旅行。そして、

今、こうして手にする『慶應マーケティング論究』第7巻。ここに掲載されている全ての論文は、マーケティングを学び僅かな年数しかたたない学生が、著名な学者と精一杯肩を並ばせ、彼らと対等に議論を戦わせようと試みている。自らの興味の赴くままに選択した研究トピックについて、既存研究の問題点を指摘し代替案を案出するという創造的な活動を行うことによって、日常生活では一見自明もしくは看過されてしまうところに亀裂を見出し、その隙間から新たな地平を開くことに成功しているのである。

末筆ながら、本論文集を執筆・編纂するにあたり、支えていただいた多くの方々に深い感謝の念をお伝えしたい。叱咤激励しあった同期。お互いがお互いの存在感なしでは、きっとこの論文集は完成しなかったであろう。ありがとう。アンケートに協力してくれた後輩。アンケートだけでなく、卒論中間発表時の鋭い質問は、我々の論文の質を高いものにしてくれた。ありがとう。陰で応援し続けてくれた家族。近すぎず離れすぎない絶妙な距離感、我々をさりげなく支えていてくれたのだと思います。ありがとうございました。第7期生のベストオブザーバーだった大学院生の先輩方。ゼミ中での的確なコメントからゼミ後の論文指導まで、本当に先輩方は我々の羅針盤でした。ありがとうございました。そして、何より、小野晃典先生。論文を最後の最後まで添削して下さった情熱、よりよいものを徹底的に追究なさる気迫に、我々は尊敬と同時に、先生の我々ゼミ生に対する愛を感じていました。本当にありがとうございました。

2011年2月吉日